

世界史・近現代史のなかの「朝鮮出兵」

九州大学大学院教授 中野 等

●朝鮮王朝への参洛要求

1587年（天正15）年5月、島津義久を降伏させ博多近郊の箱崎へ凱旋した豊臣秀吉は、九州の国割りを行って博多の復興に着手する一方で突然「バテレン追放令」を発し、イエズス会宣教師たちに20日以内に国外に退去するように命じている。この陣中で対馬島主の宗氏の秀吉への服属が確定するのであるが、秀吉は宗氏に対して朝鮮国王の参洛を実現するように要求する。国内の戦国大名に対するのと同様の原理によりつつ、秀吉は列島外に位置する「外国」の王に対しても日本朝廷への出仕を求め、それを通して自らの武威に服することを要求したのである。秀吉は自らが推戴する天皇の威稜が国内の諸勢力のみならず、海外にも及ぶことを見せしめるよう望んだともいえよう。

日本側の要求を黙殺していた朝鮮王朝は1590（天正18）年にいたって、使節派遣を決定する。関東・奥羽から凱旋した秀吉は11月に聚楽第で朝鮮使節との接見を果たす。朝鮮国王が秀吉に呈した国書はあくまで秀吉の国内統一を賀する内容であり、明を宗主国とする朝鮮側にとって日本への「服属」など思いも寄らないものであった。しかしながら、使節を京都に迎えた秀吉にとっては、すでに朝鮮国王の日本への服属は達成されたと同義と解釈され、次のステップたる「唐入り」へと駒を進めることになる。

●世界秩序再編の意図

大陸への派兵準備を進めるかたわら、秀吉は服属要求の対象をさらに拡大し、アジアの他の地域に対しても積極的な強硬策でのぞむこととなる。1591（天正19）年7月には「印地阿 昆曾靈」すなわちポルトガルのインド副王にあてて書簡を送っている。この書簡はイエズス会のヴァリニャーニからもたらされたインド副王の信書に対

する返書であるが、ここでも秀吉は自らの業績を誇示して大陸派兵の計画を告げ、日本の「神国」としての位置づけについて説いている。

また、秀吉は9月15日付で「小琉球」——これは現在のフィリピンをさすと考えられるが——に対しても日本への服属を要求する書簡を発している。ここでも他の国書と同様に、自らの誕生に際して奇瑞がみられたことを述べ、戦国乱世を収束し域内の統一を果たした秀吉のもとには朝鮮・琉球からも朝貢の使節が到来し、今や明国をも征服しようとしている。奇瑞とは、秀吉が母の胎内に宿ったとき、母が日輪（太陽）が懐中に入った夢をみたというものであり、一連の経緯は個人の所為ではなく、あくまで「天」の意向によるものとして強調される。

誕生に際しての奇瑞は、東アジアの広い地域に確認される感生帝説・感精神話の一つとみなすことができよう。秀吉は自らを「日輪の子」と位置づける誕生の奇瑞と「天」の論理を連動させることによって、既成の「国境」を超越しようとしたようである。

●江戸期における「唐入り」の記憶

1591（天正19）年12月、秀吉は関白職を甥にあたる豊臣秀次に譲って、「唐入り」に専心する体制に入る。秀吉が明国征服をめざして行った対外派兵は一般に「朝鮮出兵」「朝鮮侵略」として知られる。ついで、この戦役の名称について考えていきたい。

同時代の史料には「唐入り」「大明へ御道座」といった表現が見えるが、寛永期ごろに堀正意（杏庵）の『朝鮮征伐記』があらわされる。堀正意は藤原惺窩の高弟であり、『寛永諸家系図伝』の編纂にかかわった人物としても知られる。その後、日本中朝主義（日本中華思想）による山鹿素行の

著作などの影響もあって、江戸期に「唐入り」は「朝鮮征伐」という言説に置換されていく。このほか「朝鮮陣」,「高麗陣」,「征韓」といった言い方も多く行われる。また朝鮮の雅名である「鷄林」を用いた『鷄林軍記』(伊藤東涯著)といった書物も登場する。

いずれにしろ,「征明」などのように中国の存在を前提とするより,「朝鮮」,「高麗」などを冠して戦役を呼称することが一般化する。多くの儒学者にとって「中国」はある種の「聖地」であり,こうしたことも影響して戦役の本質がほかされていった可能性も考えられよう。

●帝国日本と朝鮮出兵

明治維新後には秀吉の功績を再認識する機運が高まり,とくに朝鮮出兵は「皇威」を発揚させたものとして,江戸時代にみられた否定的評価を一挙にくつがえしていく。さらに,朝鮮半島をめぐる日清間の緊張が高まると,この戦役に対する評価にも新たな要素が加わっていく。秀吉の対外派兵は,単なる過去の一戦争という位置づけをこえ,現実の仮想敵たる清国(中国)と対峙するうえでの重要な国民的記憶と再定置されることとなる。

こうした動きは決して政治や教育の場にとどまるものではなく,当時の日本社会全体を巻き込むものであった。『絵本朝鮮軍記』,『絵本朝鮮征伐記』といったたぐいの一般向けの簡便な書物がさかんに刊行されており,清国に対する敵愾心をあおることとなる。日清・日露戦争を戦い,1910(明治43)年に韓国併合をなしとげた帝国日本は自らの極東における立ち位置や対外的膨張政策を合理化・正当化し,国民的統合をさらに強めていくうえで,秀吉の対外戦争を歴史的なより所とした。さらに,もとより完全になくなるわけではないが,朝鮮半島を植民地化していく過程で「朝鮮征伐」や「征韓」などという言い方が避けられていったとの指摘もある。ともに帝国の臣民たる朝鮮半島の人々に対して不必要な刺激を与えないための配慮であったという(石原道博著『文禄・慶長の役』,塙書房,1963年)。

こうして次第に「文禄・慶長の役」という呼称が定着していく。韓国併合以前にも『文禄征韓水

師始末 朝鮮李舜臣伝』や『文禄慶長朝鮮役』という書名の本が出されてはいたが,名辞の定着という意味では1914(大正3)年に池内宏の『文禄・慶長の役』正編第一(『満鉄歴史調査報告』三)が刊行されたことの意味は大きかろう。日本史上の事件に元号を付して用語化する動きは,1930年代ごろからとされるが(鹿野政直著『歴史を学ぶこと』,岩波書店,1998年),それからすると「文禄・慶長の役」という表現は例外的な先駆性をもったことになる。これは池内宏が白鳥庫吉しらとりくらきち門下の東洋史家であったことも一因かもしれない。

●「世界史」上での位置づけ

敗戦の後,1960年代にはいると朝鮮半島への派兵が「侵略」行為であると強く意識され,「朝鮮侵略」という呼称がさかんに用いられるようになる。もとより,以上のような変遷は日本における(ないし日本からみた)ものであり,現在韓国では一般に「壬辰倭乱」,「丁酉再乱」,中国では「抗倭援朝」あるいは「万曆朝鮮役」,「万曆日本役」といった表現が用いられる。

そうした一方で,日本・韓国・中国での豊かな研究蓄積をもふまえつつ,戦役の名称や評価についても新たに考え直すべきとの提案もなされている。例えば,筆者は派兵の目的はあくまで明国の征服にあったとして「大陸侵攻」と称すべきとし(拙著『秀吉の軍令と大陸侵攻』,吉川弘文館,2006年),李啓煌氏も明は多いときには10万以上の兵力をこの戦争に投入し,そこには東南アジア諸地域の兵も含まれていたとして,この戦争を東アジアの全域にかかわる「国際的戦争」であったと位置づけている(李啓煌著『文禄・慶長の役と東アジア』,臨川書店,1997年)。

いうまでもなく,戦役の名称を再考しようとする姿勢はこの戦争の「一国史的理解」を見直そうとする流れと関連している。この戦争をあらためて「東アジア三国戦争」という観点から再検討しようとする国際学術会議は戦争の名称を「壬辰戦争」とすべきではないかとの提言を行っており(鄭杜熙・李璟珣編著『壬辰戦争』,明石書店,2008年),今後はまさに世界史的観点からこの「朝鮮出兵」を再定置・再評価する研究が期待される。